



花の寺殺人事件

山村美紗

---

はな てらきつじんじけん  
花の寺殺人事件

やまむらみさ  
山村美紗

© Misa Yamamura 1986

昭和61年4月15日第1刷発行

昭和63年5月23日第9刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫  
定価380円

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。  
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183729-X (0)

---



講談社文庫

# 花の寺殺人事件

山村美紗

講談社



目次

柩 <small>ひつぎ</small> の中に藤の花を	九
芙蓉の花は血の色	四七
彼岸花が死を招く	八三
桜の寺殺人事件	一一九
死化粧は菊の花	一五五
石楠花 <small>しゃくなんげ</small> の咲く寺	一九五
月下美人殺人事件	二二三
桔梗寺 <small>ききょうじ</small> の殺人	二六九

解説

中島河太郎 三〇二



# 花の寺殺人事件





柩ひつぎの中に藤の花を



野上藤子は、呉服屋から届いたばかりの着物を、ひろげて手を通してみた。

セーターの上から羽織はかったのだが、白地に藤の花が手描きになった訪問着は、匂い立つような美しさだった。

「少し地味だから、帯は、派手なものにしないで……」

三面鏡の前に立って、何本かの帯を、胸にあててみる。

結婚を前にして、藤子は幸わせ一杯だった。

名前が藤子のせいか、彼女は、小さい時から藤の花が好きだった。だから、幼稚園も、藤棚のあるあの幼稚園でなければ嫌だと駄々をこねて、遠くの幼稚園へ通ったし、日本無踊を習ったのも、舞台上、藤娘を踊りたいためだった。だから、ハンカチや、お財布など、藤の花の描かれたものをみつけると、どうしても買わずにはいられなくなってしまふ。

女は、みんな少女の頃、白馬に乗った騎士が、自分を連れに来てくれると想像するものだが、藤子は違っていた。彼女は、幼稚園にあったような見事な藤棚のところ立っているとき、男の

人がやってきて、やさしく声をかけてくれるという情景を夢みていたのである。

しかし、三十歳を過ぎても、そういうロマンチックなことはおこらず、恋愛や見合いもいくつかしたのだが、結局、実らなかった。

一度だけ、うまくいきそうになったときがあったが、彼女が、甘い気持になって、藤の花を見に行きましようかと誘うと、僕は、蜂が嫌いなので、花のあるところは苦手だといわれ、気持が冷えてしまった。

去年の春、三十三歳になった藤子は、一人で、平等院に来ていた。平等院は、藤原氏の栄華をしのばせる寺で、藤の花が美しいのでも知られている。

長く垂れ下った深い色の藤を見ながら、ぼんやりとしていた藤子は、突然、声をかけられた。「きれいな藤ですねえ」

「え？ ええ」

驚いて、藤子は、相手を見た。三十五、六歳位の真面目そうな男だった。きちんと背広を着て、サラリーマン風である。

「藤の花は、死んだ僕の姉が好きだった花なので、僕も好きで、毎年見に来るんです」

「私も、藤が好きですわ」

藤子は、藤が好きだというこの男に好感を持った。

男は、もじもじしていたが、思い切ったように言った。

「あの……実は、今、藤の花のそばに立っているあなたが、あまり美しかったので、あのコン

クールに出そうと思って、カメラで写してしまっただんですが」

「あら、そんな……」

藤子は、非難するようにいいながらも、眼を男の指すポスターに向けた。藤棚の柱に貼られたそのポスターには、大手カメラメーカーと、宇治観光協会共催の「春の宇治風景写真コンクール」の要綱が書かれていた。

「すみません。断わってからにしようと思っただんですが、意識されると、さっきのような自然ないい感じが出ないと思って、黙って撮ってしまったんです。いけなかったら、フィルム渡します」

男は、そういって、本当に、カメラから、フィルムを抜きとろうとした。

「いいですね。そうすると、今まで写した分まで駄目になってしまいうでしょう？ 現像してから、私の写っている分だけ、原版を送って下さい」

藤子は、気分を直して言った。

若い時だったら、物も言わず、フィルムをひったくって立ち去ったかもしれない。だが、三十歳にもなると、男の人から、美しいといって声をかけられるのは、悪い気のしないものである。

では、住所を教えて下さいということから、交際がはじまった。

彼は、片山二郎といって、大阪の建設会社に勤める会社員で、大阪市内のマンションに一人で住んでいた。

藤子の許可を得て彼が応募した写真が、幸運にも佳作に入選し、彼が電話をかけてきて、二人は、その展示会を見るため、再び宇治を訪れた。

藤子は、二人の出会いが、藤棚の下であったことに、運命的なものを感じていた。

二カ月後には、二人は、すっかり気の合った恋人同士になっていた。

藤子は、勤めの休みの日は、朝から彼の家へ行って、部屋の掃除や洗濯をやり、食事の仕度をした。

ウィークデーでも、お互いの都合がついた時は、一緒に食事をしたり、スナックへ飲みに行ったりした。

九月になると、二人は、結婚を約束した。

念のため、藤子は、片山に、本当に独身かどうか、戸籍をとりよせてくれるように頼んだ。

彼は、郷里は北海道だから、とり寄せるのに、時間がかかるからといって、住民票をみせてくれた。それには、二年前に、名古屋市から転出してきていることと、彼の名前だけが記載されていた。年齢や誕生日も、彼の言っていた通りで、間違いなかった。

結婚するのが本決まりになると、藤子は、毎日を、雲の上を歩いているような、ふわふわした気分で過した。

彼女は、三十を過ぎた頃から、すっかり、結婚をあきらめていた。縁談も、ほとんどなくなり、たまにあると、二人も子供のある中年男だったりしたからである。

それだけに、片山のように、年もあまりちがわないハンサムな男と結婚できるのは、夢のよう

な気持だった。

藤子は、年末で病院をやめ、結婚の準備をはじめた。勤め先の同僚や、友人には、電話で彼のことをのろけ、九州の田舎にいる両親には、手紙を書いた。

みんなに祝福され、藤子は幸わせだった。

式は、四月二十九日にきめ式場を予約した。

しかし、こんな薔薇色の毎日に翳かげりがさしたのは、一本の電話からだった。

## 2

暮の二十五日。昼の一時に藤子の家へ、片山から電話がかかって来た。彼とは毎日電話で連絡し合っていた。

ジーと公衆電話特有の音がして、声が入ってきた。

「年末で、仕事が忙しくて、会社に泊り込みなんだ。二、三日会えないけど、昼の一時と、夜の九時には電話するから我慢してくれよ。それから……」

「え？」

「愛してるよ」

私も……と言おうとしたとき、電話が切れてしまった。

電話は短かったが、愛しているといわれたことで、藤子は、満足だった。机の上の時計を、なにげなく見ていたが、十秒間だった。たった十秒の電話でも女をこれだけ幸にするのだなあと、

藤子は感動した。

約束通り、電話は、夜の九時にもかかって来た。

「会社のそばの公衆電話から掛けてるんだ。十円玉がないから、手早く喋るよ。何か変わったことはない？」

藤子は、今日一日の自分の生活をかいつまんで話した。

「で、いつ会えるの？」

「二十八日には会える、じゃ、おやすみ」

今度も、短い電話だった。しかし、昼よりは長く十八秒だった。

線路が近いらしく、背後に遮断機の鳴る音がした。彼の言っているように、公衆電話から、掛けているのだらう。

翌日の昼は十秒だった。

公衆電話で、ピーと鳴ってから切れるまでは、十円分である。

「十円じゃ十秒しか話せないのね。つまらないわ」

藤子は、物足りない顔で、受話器を置いた。そのあと、ふと、変な気がした。

彼の会社は、大阪市内である、そして、藤子の家は、京都市内である。

「十円では、もう少し長く喋れるのではないだらうか？ 少なくとも、いつもは、もう少し長いような気がする」

藤子は、電話帳についているテレホンガイドを出してきて、電話料を調べてみた。



大阪——京都 十円で21秒

とある。

△二十一秒というと、倍は喋れる。十秒しか喋れないのは、何故だろうか？  
 しばらく考えてから、今度は、逆に、京都から十円で、どの都市が何秒か調べてみた。  
 勿論、郡部は入れず、主な都市だけである。

京都	——	京都	180秒
京都	——	大津	80秒
京都	——	奈良	30秒
京都	——	神戸	15秒
京都	——	東京	4秒
京都	——	沖繩	2.5秒
京都	——	北海道	2.5秒

距離によって、随分料金が違うものである。郵便だと、距離が長ければ、それだけ、列車に乗せ、又、乗りかえ、山道を配達し……という風に、費用も手間もかかるが、電話は、電波なのだ